

## 我が学者人生のモデル

第9期大学院生 白石 秀壽

察しのいい読者は本稿のタイトルがかのハーバート・サイモンの自伝 *Models of My Life* と同じであることに気付いたかもしれない。「盗作だ」などと後ろ指を指されることがないようにタイトルをあえて英訳するならば、本稿は *A Model of My Life* と訳出されよう。その違いは、前者が、偉大なる研究者が自分の学者人生(過去)を振り返っての自伝であるのに対して、後者は、これから学者人生を歩む若き研究者が今後(未来)を見据えての決意表明という点にある。ここで単数形 (*A Model*) / 複数形 (*Models*) と過去 / 未来の関連について、若干の説明を加えておく必要があるだろう。そもそもサイモンは、その著書に *A Theory of My Life* というタイトルを付ける予定であったという。なぜ彼が “Theories” ではなく、“Models” を選択したのか分からない。しかし、そこに踏み込まずとも、“A Model” と “Models” の違いを説明することができる。サイモンは、ノーベル経済学賞の受賞者であり、その輝かしい業績は経営学や経済学のみならず、心理学、コンピューター・サイエンス、哲学などにも及んでいる。そのような多岐にわたる業績を振り返ったとき、彼は “A Model” では自分の学者人生を描くことはできないと考え、“Models” を選択したのであろう。しかし、これから学者人生を歩むわたしにとっては、多様な側面を描いた “Models” ではなく、“A Model”，すなわち今後の行動指針となるような1つのモデルの方が望ましいだろう。したがって、*A Model of My Life* というタイトルの中には、今後の学者人生の決意が込められている。

学問であれ、スポーツであれ、経営であれ、何か事を成そうとするとき、人は、誰かを模倣することから始めたり、何かをベンチマークとしたりする。幸いもわたしには目標とすべき師が2人もいる。小野晃典先生と久保知一先生である。わたしは、2つのゼミを経験し、2人の先生から指導を頂き、2人の研究者の背中を見て育った。その過程の中で、ここでわたしが掲げる学者人生のモデルの土台が形成された。それは研究と教育の融合および共進歩である。それはわたしが5年間の大学院生活で2人の先生から学んだことの1つであった。両先生は研究と教育をどちらも決して妥協しはしないし、そのバランスをうまくとっている。わたしは3月1日より鳥取大学地域学部に講師として着任する。まだゼミを担当するかどうかは定かではないが、ゼミを持つことになった暁には、小野ゼミや久保ゼミのように、いや、小野ゼミや久保ゼミに負けないようなゼミを作りたい。数十年後、自分の学者人生のモデルは “Models” になっているかもしれない。しかし、2人の師から教わったこと・学んだことだけは忘れずに研究と教育に取り組んでいきたい。

最後に、小野先生へ。5年前、わたしを受け入れてくださり誠にありがとうございました。小野先生、久保先生、今後ともご指導の程よろしく申し上げます。